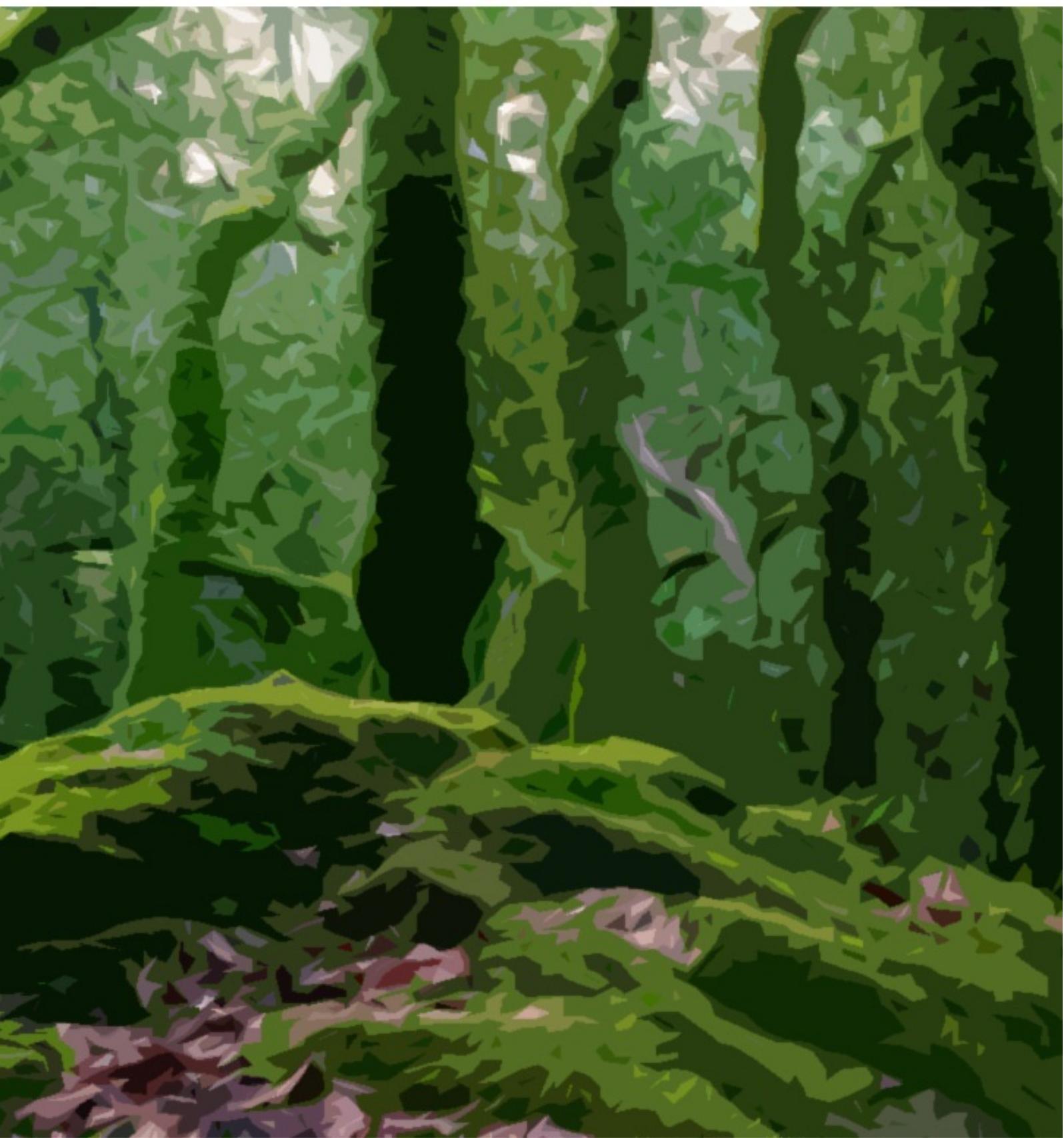


# ある楽園の話



ふと、わたしが目をひらくと、そこは真っ赤でした。良いにおいもします。

そこは狭いのでしょうか。体を小さく小さくまるめていて、ようやく隙間ができる場所でした。とてもきゅうくつで、息が苦しくなってきます。

ここから出ようとわたしはぐっと手で目の前のかべを押してみました。

やわらかなかべは、わたしの手のひらにぴったりとはりつくほどみずみずしく、つるつる、すべすべとしたかんじでした。

力をすこしずつ込めていくと、それにあわせてゆっくりと開いていきます。

かべが開くと、わたしは自由になりました。苦しかった息もすっかり治りました。

口をおおきくひらいて息を吸うと、おいしい空気が体中にしみわたります。

わたしは、身体をうんとおぼして立ち上がりました。

わたしをつつんでいた、やわらかいかべのようなものと思っていたものは、赤いチューリップの花でした。

わたしは、今までチューリップのつぼみの中で眠っていたのです。

ところで、ここはどこなのでしょう。わたしはどうしてチューリップの中で眠っていたのでしょうか。わたしはだれなのでしょう。何もわかりません。

わかるのは、わたしの頭の上にあるのは青い空であるということ。オレンジ色の大きな丸い形をしたものは、わたしたちに必要な太陽であるということ。空を流れるように動いているのが白い雲であるということ。わたしの周りで吹いているものがあたたかい風であること。

そして周りに咲いているたくさんのものがお花で、わたしはその中のひとつのチューリップの中で目が覚めたということだけです。

きょろきょろとまわりを見ていると、遠くの空から女の子たちが飛んできました。

みんな、ふわふわとした雲のようにやわらかそうなかみのけで、お花の花びらのような服をきていました。

女の子たちは、わたしのそばにふわりと来ると、わたしの手をとって、わたしの目覚めをよろこんでくれます。

「新しい私たちの妹が起きたわ」

「ずいぶんとお寝坊さんなのね、あなたが一番最後よ」

「おはよう！」

わたしも元気よく「おはよう」といいます。

女の子たちの背中には大きな四枚の羽が生えていました。

見ていると目がくらくらしてしまうような、きれいな色の羽ばかりです。

その中から虹色の羽が生えた女の子が一步前を出て、わたしに近づいてきました。

「あなたはね、蝶なの」

「チョウ？」

女の子が何を言っているかわからないわたしは、首をよこにかたむけます。

すると、女の子はわたしを指さしました。

「そう、蝶。ほら、背中を見て。あなたにも私たちと同じ羽が生えているわ」

言われたとおりに背中をみると、わたしにも他の女の子と同じように羽が四枚生えていました。形は女の子のように大きくなり、小さくて。色もきれいな色ではなくて。白い色にぶちがついていたけれど。

かわいらしい羽ね。と女の子たちは口をそろえてほめてくれました。

「さあ、おいしいお花の蜜が吸える花畑の場所も、雨のときに隠れる場所も、なんでも。全部おしえてあげる！」

わたしと女の子たちはそよ風にのって、一日中つかれるまで飛び回りました。

チューリップのつぼみの中でわたしが生まれて、月日はあっという間に過ぎました。いろいろなことも、わたしのお姉さんたちに教わって勉強しました。

ここは『楽園』と呼ばれる場所なのだそうです。誰も本当の名前は知らないけれど、ここで生きている生き物たちはみんな、この場所をそう呼びます。だから、わたしも楽園と呼ぶことにしました。

楽園には、美しいものしか生まれません。そう主様が決めたのです。

主様とは、ここをおつくりになった方のことです。誰もそのお姿を見たことはありません。誰もそのお声を聴いたことはありません。

主様の次に偉い御使い様だけが主様のお姿とお声を知っているのです。御使い様はときおり主様のことばを、私たちに届けてくださいます。

「楽園で生まれることを許されたお前は美しい生き物なのだから、誇りに思いなさい。これは我が主の言葉である」

はじめて御使い様にお会いした時、そう私に告げられました。

私は美しいから楽園で生まれることを許されました。けれども、生まれることを許されなかった美しくない生き物は、どこに生まれて、どこで生きているのでしょうか。

「美しくないものはどこで生まれるの？」

お姉さんたちに聞いても「そんなこと考えたこともないわ」「わからないわ」「どうしてそんなことが気になるの？」「気にする必要なんてないじゃない」と返事がかえってくるばかり。

森の泉の水辺に住んでいる物知りなユニコーンなら知っているかもしれないと思い、私はユニコーンのもとをたずねました。

私の疑問をじっくりと聞いてくれたユニコーンは、首をゆっくりと横に振って「それは知らないな」といいました。そして、お姉さんたちと同じように「美しくないものはここでは生まれることはないのだから、そんなことを気にする必要はない」とつづけました。

物知りのユニコーンでも知らないことがあることに、わたしは驚きをおぼせませんでした。ますます美しくないものはどこで生まれるのか気になりましたが、楽園に住むすべての生き物に問いかけても、みんなお姉さんたちやユニコーンのように「知らない」と答えが返ってくるのだと薄々感じていました。

「そんなに気になるのなら、御使い様にたずねてごらんよ」と言われ、ある日いつものように主様のお言葉を届けにいらっしゃった御使い様に話しかけたことがありました。

けれども、御使い様を前にすると、そのような質問をするのはいけないことのような気がして、結局たずねることが出来ませんでした。

おろおろとしている私の心の中を読んだかのように、御使い様は微笑みながら、私の頭に手を置いて祝福を授けてくださいました。

「より美しくなることだけを考えなさい。楽園の主様に一番美しいと認められたものは、永遠の命を授かることができるのだから」

永遠の命、それはいったいどんな物なのでしょう。

主様からいただけるのだから、きっとそれはおいしいお花の蜜を見つけたときよりも、うれしくなるものなのでしょう。

わたしは、まだ知らないそれについて、いろいろ想像したりしました。

もしもわたしがそれらを手に入れることができたら、お姉さんにも分けてあげようと思えました。

その日、わたしは森の泉に咲いていたスイレンの花の中でねむりました。

誰よりも美しい実を実らせたい。永遠の命がほしい。

この楽園で一番美しいものになりたい。

そんな思いは日に日に私の胸を焦がしていく。

私の思いが実に通じたのか、次第に実の成長が早くなっていった。

大きくなり、赤色に染まっていくリンゴをみて私はほくそ笑む。これなら、誰よりも美しい実になりそうだ。私の努力は報われたのだと、喜びもした。

けれど、喜びは長くは続かなかった。成長はリンゴが熟した後も続き止まらなかった。ひとつのリンゴが、黒ずんでしまったのだ。そして、ぼたりとおちた。そろそろ収穫をしようと思った日の出来事だった。

地面に転がっている赤黒く色づいたリンゴの実は、とても甘い香りを放っている。木になっているほかのどのリンゴよりもおいしそうに見えたが、私は得体の知れない恐怖を覚えてリンゴを木の根元近くに掘った穴に埋めてしまった。

そして、あのリンゴの実のことは忘れようと努めた。しかし、それは無駄なことだった。

地面に落ちていくリンゴは個数を増やしていったのだ。その度に私はリンゴを地面に埋めた。

姉の木の実は明るい赤色で、今もなお木に実っている。それなのに、私の実だけがどうして……。どうしたらいいか分からなかった。水をやる回数を減らしても、肥料を変えても、何も変わらなかった。リンゴは相変わらず地面におちている。

けれど誰にも相談することができなかった。ほかの姉妹たちは誰も自分と同じようなことが起きていなかったからだ。焦りが私をますます追い詰めていった。思うようにならないリンゴの木に怒りを覚えさえもした。

「どうして私の思った通りにならないの！」

木の幹を強く叩く。ぼとりとまたリンゴが落ちた。

それでも世話をやめることはしなかった。美しさや永遠の命への執念だったのだと思う。

ある日、いつものようにリンゴの木の世話をしようと木の所に行くと、そこになにやら長い生き物が木に絡み付いていた。

私は、その生き物を確認しようと、そっと音を立てずに近づき、物陰に隠れた。あんな生き物は楽園で今まで見たことがなかった。

緑色の細長い胴を持ったその生き物は、霊峰に住む龍に似ている気もした。しかし、手足もなければ爪もない。体を覆う鱗はしめっているのか、怪しく光っていた。木の幹をすするすと這う姿を見て、私は震えるばかりだった。

この生き物を表現できる言葉を知らなかった。知っている言葉で表現するならば、『美しい生き物』なのだろうか。

「おやおや、腐ったリンゴの匂いに誘われて来たら、こんなところに」

生き物は、ちろちろと赤い下を大きく裂けた口から出して独り言を言った。

『腐ったリンゴ』

その言葉に私は、実を埋めたはずの穴を見る。そこはあの生き物が掘り返したのだろうか、ぽっかりと大きな穴ができています。穴の先は真っ暗で何も見えなかった。

「あなたは誰？」

物陰から頭だけをだして震える声で私は生き物に声をかけた。生き物は、私のほうを振り向くとうやうやしく頭をたれるようにして挨拶をした。

「こんにちは、お嬢さん。わたくしは蛇と申します。この実の匂いに誘われて、穴を掘り進めていたところ、この楽園に来てしまったのですよ」

蛇は、しっぽの先で地面を指し示す。視線を向けて私は小さく悲鳴を上げた。そこには、埋めたリンゴの実たちが、あの時とかわらないままの姿で地面に転がっていた。

「ここは良いところですね。私のいたところと違い、醜いものがまったくない所だ」

蛇は目を細めて楽園を眺めながら言う。

「醜い？」

「美しいものということですよ。お嬢さん」

「あなたは……その、醜いものが生まれるところからきたの？」

「ええ、そうです。楽園の外には、楽園で生まれることを許されなかった生き物が数多くいるのです」

かつて私が疑問に思っていたことの答えを、この蛇という生き物は知っている。おさえきれない好奇心から、私は物影から一步ふみだした。

「ああ、美しい。やはり楽園に生きる蝶は見るのも憚られるような美が備わっている」

私の姿を見た蛇は、うれしそうにそう言うと、しゅるしゅると木から降りて、こちらに這い寄って来る。地を這う姿は確かに美しいとは言えない。

「あなたの世界にも蝶がいるの？」

「ええ、ええ。もちろん。しかしながら、どれも醜いものばかりですが」

ゆがんだ羽をもったもの、枚数が欠けて空を飛べないもの、毒の鱗粉をもったもの、おぞましい姿をしたもの――。

蛇は様々な蝶のことを教えてくれたが、私には殆ど想像することができなかった。ただ、私よりも美しい、醜くおぞましい姿をしているということだけが理解できた。

「しかし、美しいものしかないから、それぞれの本当の美が薄れているようにも思えるのです。そう、たとえば貴方の美とか……」

「美が薄れる？ 私も醜いということなの？」

「いえいえ、そういうわけではありません。貴方は十分にお美しい。ただ、同じようなものがたくさんあれば、美の価値観というものもまた変わってしまうということなのです」

「貴方は何が言っていることがわからないわ」

私は蛇から離れるようにして後ずさりをした。

蛇は、何を考えているのかわからない表情で私を見つめている。その目に見つめられると、まるで私が今まで心の中で抱えてきたものが、すべて蛇に見られているような気がして、気分が悪くなった。

「貴方は何がしたいの？」

「わたくしと共に参りませんか？」

こんな楽園で私の美を埋もれさすにはもったいないのだと。自分の世界に来れば、私は一番美しい存在になれるのだと。蛇はそういった。

楽園を出たことなど、一度もない。出た先にはいったい何が待ち受けているのだろうか。本当に出て行ってしまってもいいのだろうか。楽園の外で自分は生きていけるのだろうか。

そんな不安はあったが、『誰よりも美しくなれる』私は蛇の言葉に心が揺らぐのを覚えた。

楽園に生まれたのだから、確かに私は美しい存在だ。

けれど、私よりも美しい生き物はたくさんいた。虹色の羽を持った姉などがそうだ。

「本当に、一番美しい存在になれるの……？」

「醜いわたくしたちが、どうして美しい貴方に勝てるというのでしょうか」

こうして、ここでリンゴの木を育てていたって、私の羽の色や形が変わったりするはずもない。私はここでは一番美しい存在にはなれない。私はここでは認められない。永遠の命なんて、手に入らない。

楽園にいてどちらの願いも叶わないのなら、外に出て一つだけ願いが叶ったほうが良いのではないだろうか。

「……いくわ。私をここから連れ出して」

「そう言ってくださると思っておりました。ささ、参りましょう」

するすると蛇は穴の中に入って行った。私も誘われるようにして穴の側による。

暗く、光も通さない穴だ。中がどうなっているのかも分からない。地べたに座り、その穴に足を入れようとして、私はふと側のリンゴの木を見上げた。もう、世話をすることもない。思えば、この木には苦勞ばかりさせられた。せいせいする。

「さようなら」

そう木に別れを告げた。その瞬間に。

ぼたり。ぼたり。ぼたり。残っていたリンゴが地面に落ちていく。腐って柔らかくなっていた実は地面にべちゃりと叩きつけられて、ぐちゃぐちゃになった。崩れたリンゴからあまったるい香りがむせ返るほど漂った。リンゴの木の緑色の葉も、茶色く枯れはて、風に吹かれて散って行く。

死んだリンゴの木を見て、私はもう戻れないことを悟った。蛇に続いて、私は黒い穴の中へおちていく。

するすると、どこまでも続く穴を降りて行く。私一人がようやく通れる程度の大きさだった穴は、奥に進むに連れてどんどん狭くなっているようだった。通り抜けるには、私の背中につい

ている羽が邪魔だった。羽は狭い穴で擦り切れてぼろぼろになっていた。

どうせ、もともと美しくない羽だ。こんなものがついていたら、よけいにみすぼらしいではないか。蛇の世界で一番美しくなれる私には、このような羽などふさわしくないものだ。

私はそう考えて、羽をすべてむしりとった。後悔はしなかった。むしろ、今まで悩みの種だったものが消えてくれて、すがすがしい気持ちだった。

楽園を捨て、羽を捨て、蝶だった生き物は蛇の言葉に誘われるまま、醜い生き物しかいない世界へと降り立った。

楽園の主とその御使いは、それを傍観していた。蛇に唆された彼女を説得しても無意味であるとわかっていたからだ。

それに、彼女はそのままこの場にも余計に醜くなるだけだった。醜い生き物は、楽園にはいない。だから何もしなかった。

楽園から出ていった後、彼女がどうなってしまったのかは誰も知らない。御使いにたずねようとするものすらいなかった。

皆、楽園の外に世界があるということも、醜い生き物がいるということも、想像したことすら無いからだ。蝶はただ死んでしまったのだと思っていた。

そうして楽園に生きる生き物は、彼女のことを忘れていった。いなくなった彼女のことを嘆き悲しんでいた蝶の姉妹たちでさえも、いつしか彼女の存在など初めからなかったかのように、明るく振舞うようになった。いつか主に選ばれ、永遠の命を手に入れることを夢見ながら、木の世話をつづけている。

今日も楽園には美しい生き物しかいない。